

# 清 月

10月中の出句 17名 延べ617句



第171号 平成26年10月

季節が動く句は十分推敲しましょう

ゆたか

私が、かつて南北朝時代の古戦場（大阪・四條畷）にある楠木正行公（小楠公）の墓所近くにある樹齢数百年の樟を詠んだ「古戦場一步も退かぬ樟夏木」と言う句があります。

この句は、下五を「樟若葉・秋の樟・雪の樟」に替えても季節が変わるものの俳句らしい叙述となります。

この様に季語を他の季節の言葉と入れ替えても句の形式が成立している状態の句のことを「季が動く」句と言い、安易に季が動く駄句とされます。

私は、前句を発表するに当たり、天候・時刻などの状況を変えて一年以上通って、樟と対峙し勢いを最も感じたのが、盛夏の樹影であったことから「樟夏木」以外の季語との組み合わせはないとの確信を得て発表した次第です。

今月の選句で次の句などが季が動く句として気になりました。

- 日溜りへ犬寝ころびて秋日和 秋日和↓日向ぼこ・冬日和・春日和・春日影
- 稲刈の後の風景撮影し 稲刈の↓御田植の・夕立の・台風の・宵宮の・雪掻きの
- 干柿や軒の遙かに一つ星 干柿や↓風鈴や・釣葱・巢燕の・灯籠の・氷柱伸びぶ
- 梓川豊かに流る十月 十月↓雪解どき・花筏・五月来ぬ・夕立あと・テント村
- 決戦に負けてしまひぬ蚯蚓鳴く 蚯蚓鳴く↓地虫鳴く・田螺鳴く・亀鳴くや
- 月蝕は雲の上なり夜寒かな 夜寒かな↓寒夜かな・余寒かな・熱き夜・盆踊
- 金風を切り裂き走るリニアかな 金風を↓春風を・黒南風を・凧を

以上

目次

近詠	ゆたか	2		
雑詠選	ゆたか	3		
寸感	ゆたか	9		
互選集計結果報告	事務局	10		
互選一〇句の披講	幹夫		しゆじ	よし子
	宏一		省司	美琴
	允孝		順一	睦夫
				恵山
				11
				12
				13

近詠

野田ゆたか

根限り鳴く神鶏や冬近し  
 はやも雨意兆す雲々秋時雨  
 大の字を抱きて装ふ如意ヶ嶽  
 初鴨の陣ゆるぎなし浮御堂  
 二階窓開けて花街の十三夜

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

瀬しぶきの魚道の石や崩れ築 千葉 清水恵山  
 馬肥ゆる北の大地の草原に 同  
 時代祭歴史の縮図目の前に 同  
 休田の土整へて紫雲英蒔く 同  
 晩年と言はるゝ歳や身にぞ入む 同  
 秋映す八幡堀の水鏡 吹田 池下よし子  
 借景の叡山模糊と風炉名残り 同  
 捨つるものすてしより冬支度 同  
 冷え冷えと回廊長き永平寺 同  
 新米の手のひら熱き塩むすび 同

黒光る放牧の牛秋日濃し 岐阜 石崎そうびん  
 色褪せる蕎麦屋の暖簾秋時雨 同  
 威銃一乗谷を揺るがせり 同  
 すさまじや傘の形の連判状 同  
 供華萎む領主の墓や秋の風 同  
 縄文も弥生の里も天高し 岡山 橋本幹夫  
 息災に同胞集ふ亥の子餅 同  
 曳行の駒と立寄る秋の川 同  
 威銃止みて振り向く九十九折 同  
 隧道を出でて野山の錦かな 同  
 保育士の大きな身振り運動会 大阪 木村宏一  
 新松子つんと尖りし寡黙なり 同  
 秋日和長蛇の列の国宝展 同

身を焦す宇宙の神秘秋の夜 大阪 木村宏一  
 運動会リアルタイムの画像受く 同  
 山小屋の番人去りて冬隣 三重 後藤允孝  
 大輪の白菊並ぶ路地日和 同  
 秋しぐれ杖衝坂のけむる道 同  
 秋耕の土柔らかき鍬の先 同  
 藁塚や郷愁誘ふ鳶の声 同  
 新米に小首傾げる水加減 千葉 田村公平  
 奉納の文字黒々と新走 同  
 廃屋の土塀彩る蔦紅葉 同  
 角立てて耳を揃える今年米 同  
 廃校の更地青々秋の空 同  
 賽銭を上げて椎の実ポケットに 千葉 筒井省司

雨上がり頭深々ゑのこ草 千葉 筒井省司  
 六地藏やさしき顔に菊香る 同  
 万葉の歌碑に一片銀杏散る 同  
 野路の秋馬頭観音黙座して 同  
 豆力士去りし土俵に秋の風 鳥取 瀬尾睦夫  
 寝転んで刈田の上や空広し 同  
 釣竿の四五本揃へ鯨日和 同  
 どの道を行くも紅色柿すだれ 同  
 子どもから声かけられて赤い羽根 同  
 白壁に収まりきれず蔦紅葉 静岡 渡邊春生  
 応援席陣取ること運動会 同  
 こすもすの風の中なる絵本館 同  
 深秋や鉛筆の芯尖らせて 同

虫の音や嵯峨野の闇を深くして静岡渡邊春生  
 秋夕焼カリオン響く引揚館大阪森戸しゆじ  
 短めの竿に稲干す老農夫同  
 連休や一日ひと畦稲を刈る同  
 たわわなる畦を占めたる稲穂かな同  
 一片の雲なき空や菊日和三重山口美琴  
 初物と子らに届けし栗ご飯同  
 十月や予定の多き丸印同  
 無患子や遠き記憶の音を聞く同  
 古里の山が教える冬支度島根白根鈴音  
 佳き日には佳き空となり鰯雲同  
 寂しみて時を刻むや秋の雨同  
 秋うららラスクに残ししパンの耳同

実石榴や嘗て電器店ありし跡愛知石川順一  
 円陣をなす男らは葦を焼く同  
 秋の雨すつかり止んで居る朝同  
 金網の前に紫式部かな同  
 どの畠も輝くやうな豊の秋山梨志村万香  
 これよりは御岳見れば祈る秋同  
 夕暮れてざわめく木々の秋寂し同  
 鉛筆を削る匂ひや天高し愛知駒田暉風  
 秒針の音なく刻む初時雨同

瀬しぶきの魚道の石や崩れ築 恵山

シーズン終了後の下り築は、捨て置かれて増水などで自然に崩れ放置される。

魚を誘導していた石は、今も飛沫をあげている景に一抹の淋しさを覚えます。

端的な言葉で余すなく詠まれています。

秋映す 八幡堀の水鏡 よし子

古くは、近江商人を生んだ八幡堀。近年は、観桜や観楓で有名な水郷巡り。

澄んだ水鏡に空や紅葉が映っている様子など八幡堀の景が美しく伝わってきます。

水鏡の名詞止めがよく効いています。

黒光る放牧の牛 秋日濃し そうびん

秋日には、秋の一日という意もあるが、

この句では秋の太陽光が詠まれている。仲秋の日ざしを背に牛の群れが牧場の草

を食んでいる様子が見えてきます。

黒光るが句の奥行きを深めています。

縄文も弥生の里も天高し 幹夫

復元された住居や生活用具などから古代人の生活がロマン豊に伝わってきます。

また行間から秋晴の下での漁獵・狩獵・農耕など様子などが連想させられます。

言葉の省略などよく整理されています。

保育士の大きな身振り運動会 宏一

園児の両親、祖父母ら一族を巻き込んだの保育園の運動会の様子が見えてきます。

成長の成果を見せようとする保育士の動作も大きくなつて来ることも領けます。

保育士の愛情を感じさせられます。

一片の雲なき空や菊日和 美琴

「空や」を削って「一片の雲なき菊日和」

だけで意が通じますが、暑くも寒くもなく菊を観るのに最も佳い天候である事がよく

伝わってきます。

観菊の穏やかな景が感じられます。

### 互選一〇句の集計結果 互選者十人

#### 高点句

五点 六地藏やさしき顔に菊香る

筒井省司

四点 瀬しぶきの魚道の石や崩れ築

清水恵山

四点 新米に小首傾げる水加減

田村公平

#### 高点者

十一点 橋本幹夫

九点 池下よし子

八点 筒井省司

八点 田村公平

互選一〇句

橋本幹夫選

秋耕の土柔らかき鋤の先 後藤允孝  
 銀杏黄葉舞ひ散る一葉菜とす 山口美琴  
 古里の山が教える冬支度 白根鈴音  
 新米の手のひら熱き塩むすび 池下よし子  
 炊き立ての湯気も馳走や今年米 瀬尾睦夫  
 岸壁の母の棧橋ススキの穂 森戸しゆじ  
 六地藏やさしき顔に菊香る 筒井省司  
 瀬しぶきの魚道の石や崩れ築 清水恵山  
 日溜りへ犬寝ころびて秋日和 木村宏一  
 青蜜柑土の匂ひを知つてゐる 石川順一

互選一〇句 森戸しゆじ選

新松子つんと尖りし寡黙かな 木村宏一  
 色褪せる蕎麦屋の暖簾秋時雨 石崎そうびん  
 実石榴や嘗て電器店ありし跡 石川順一  
 曳行の駒と立寄る秋の川 橋本幹夫  
 これよりは御岳見れば祈る秋 志村万香  
 捨つるものすてしより冬支度 池下よし子  
 瀬しぶきの魚道の石や崩れ築 清水恵山  
 賽銭を上げて椎の実ボケツトに 筒井省司  
 廃屋の土塀彩る蔦紅葉 田村公平  
 山小屋の番人去りて冬隣 後藤允孝

互選一〇句

木村宏一選

短めの竿に稲干老夫婦 森戸しゆじ  
 色褪せる蕎麦屋の暖簾秋時雨 石崎そうびん  
 曳行の駒と立寄る秋の川 橋本幹夫  
 捨つるものすてしより冬支度 池下よし子  
 一片の雲なき空や菊日和 山口美琴  
 瀬しぶきの魚道の石や崩れ築 清水恵山  
 六地藏やさしき顔に菊香る 筒井省司  
 新米に小首傾げる水加減 田村公平  
 白壁に収まりきれず蔦紅葉 渡邊春生  
 古里の山が教える冬支度 白根鈴音

互選一〇句 筒井省司選

生き様をふと振り返る秋の暮 田村公平  
 ハーブ園足湯の熱さ秋の風 木村宏一  
 しらみゆく郡上八幡霧深し 石崎そうびん  
 炊き立ての湯気も馳走や今年米 瀬尾睦夫  
 猫とても掴む術なし翳雲 白根鈴音  
 新蕎麦を打つ人もまた修行の身 後藤允孝  
 野良灼けの温顔笑みて新酒汲む 清水恵山  
 朝顔の実と書き記す茶封筒 橋本幹夫  
 連休や一日ひと畦稲を刈る 森戸しゆじ  
 老いてなほ似た者夫婦とろろ汁 池下よしこ

互選一〇句

池下よし子選

新松子つんと尖りて寡黙なり 木村宏一  
 縄文も弥生の里も天高し 橋本幹夫  
 どの畠も輝くやうな豊の秋 志村万香  
 一片の雲なき空や菊日和 山口美琴  
 曇天を破るが如く百舌鳥猛る 筒井省司  
 新米に小首傾げる水加減 田村公平  
 白壁に収まりきれず蔦紅葉 渡邊春生  
 秋耕の土柔らかき鋤の先 後藤允孝  
 炊き立ての湯気も馳走や今年米 瀬尾睦夫  
 佳き日には佳き空となり翳雲 白根鈴音

互選一〇句 清水恵山選

借景の叡山糝糊と風炉名残 池下よし子  
 虫の音や嵯峨野の闇を深くして 春生  
 どの畠も輝くやうな豊の秋 万香  
 秋入日心がわりや雲の色 木村宏一  
 六地藏やさしき顔に菊香る 筒井省司  
 縄文も弥生の里も天高し 橋本幹夫  
 朝霧の牧にくぐもる牛の声 そうびん  
 古里の山が教へる冬支度 白根鈴音  
 円陣をなす男らは葦を焼く 石川順一  
 どの道を行くも紅色柿すだれ 瀬尾睦夫

互選一〇句

山口美琴選

保育士の大きな身振り運動会 木村宏一  
 色褪せる蕎麦屋の暖簾秋時雨 石崎そうびん  
 縄文も弥生の里も天高し 橋本幹夫  
 これよりは御岳見れば祈る秋 志村万香  
 捨つるものすてしより冬仕度 池下よし子  
 山の陽や流れの早き下り築 清水恵山  
 六地藏やさしき顔に菊香る 筒井省司  
 新米に小首傾げる水加減 田村公平  
 こすもすの風の中なる絵本館 渡邊春生  
 豆力土去りし土俵に秋の風 瀬尾睦夫

互選一〇句 瀬尾睦夫選

秒針の音なく刻む初時雨 駒田暉風  
 息災に同胞集ふ亥の子餅 橋本幹夫  
 夕暮れてざわめく木々の秋寂し 志村万香  
 一片の雲なき空や菊日和 山口美琴  
 新米に小首傾げる水加減 田村公平  
 たわわにも畦を占めたる稲穂かな 森戸しゆじ  
 水澄むや心の淀み拭ひ去る 後藤允孝  
 今生の旅はどこまで秋の雲 そうびん  
 農小屋に人の出入りや柿の秋 池下よし子  
 歳経たる庭の万年青の実の赤し 清水恵山

互選一〇句

後藤允孝選

短めの竿に稲干す老農夫 森戸しゆじ  
秒針の音なく刻む初時雨 駒田暉風  
曳行の駒と立寄る秋の川 橋本幹夫  
これよりは御岳見れば祈る秋 志村万香  
しろがねのひかり波打つ芒原 池下よし子  
六地藏やさしき顔に菊香る 筒井省司  
里山に深き杭打つ猪の垣 田村公平  
白壁に収まりきれず蔦紅葉 渡辺春生  
寝転んで刈田の上や空広し 瀬尾睦夫  
佳き日には佳き空となり 白根鈴音

互選一〇句

石川順一選

秋の空光の帯を鳥はゆく 橋本幹夫  
瀬しぶきの魚道の石や崩れ築 清水恵山  
タンカーが浮いて湾内秋日濃し 田村公平  
一畝の菜虫を取りて茶をすすり 筒井省司  
松手入れ親子二代の缺音 後藤允孝  
猫とても掴む術なし 鯛雲 鈴音  
火祭やますます赤き夜の天狗 橋本幹夫  
長き夜の開けてまた閉づ方丈記 そうびん  
サフランや酒は二合を良しとせん 橋本幹夫  
三歳が英語でおどすハロウイン 池下よし子

インターネット俳句 清月  
第171号  
平成26年10月中の出句から

発行  
平成26年11月20日

主宰 兼 編集  
野田ゆたか

発行所  
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ  
[https://haiku575.info/seigetukai/  
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)